

この度、2014年の *English Linguistics* 31 巻 1 号に掲載された拙稿 “On the Development of *The Point Is* and Related Issues in the History of American English” に対して「日本英語学会賞（論文）」を頂くことが出来ました。選考委員の先生方からの御配慮へ心より御礼申し上げます。このような賞を頂くことは身に余る光栄であり、研究生活においても忘れえぬ経験となります。日本英語学会の会員になり 20 年を迎えますが、理論的枠組みに囚われずに英語学の様々な課題について学ぶことが出来ました。この受賞を機に、取り分け本学会における知的且つ社会的活動を通し、自身の教育研究だけではなく若手研究者の育成へも絶えず積極的に関わることで、感謝に報いたいと存じます。

本論文はアメリカ英語における *the point is* を構文と見做し、その発生と発達の経緯を文法化と構文理論の点から考察しました。複数の大規模コーパスの検索から、*the point is* は主情報である話者の見解の直前に使用されるという談話統語上の制約が確認でき、会話データからは、*the point is* が音調上独立して使用される傾向が明らかとなりました。更に、修飾語の有無（e.g. *the only point is*, *∅ point is*）、補文化辞 *that* の有無によるヴァリエーション（i.e. *the point is that...*, *the point is ∅*）なども確認できることから、構文としての *the point is* は、使用頻度に応じた構文拡張を遂げていることを例証しました。

私が常々自身に言い聞かせてきたことは、広範な研究領域を持ち、言語学の様々な分野における未開拓分野を探求し、全く新しい研究領域を切り開くということです。言語研究に対するこうした姿勢は、以下のような理由で自然と形成されたと思われまます。1990 年代後半、吉野利弘先生（現在立教大学名誉教授）の下で中世英語英文学に関わる高水準の研究に打ち込むという幸運に恵まれました。同学部時代にはフランス語も熱心に学習し、細川哲士先生（現在立教大学名誉教授）のアドバイスでラテン語と古仏語へも誘われました。2000 年代前半には、研究活動と研究領域の裾野を拡げるには絶好の機会といえる、カリフォルニア大学サンタ・バーバラ校において学位取得へ向けた研究機会に恵まれました。同大学院時代には、フィールド言語学、談話研究およびトランスクリプション技術、言語類型論、コーパス言語学、非印欧語族に基づく歴史言語学などに昼夜を問わず打ち込みました。2 年間の韓国語学習、外国語試験に通過するためのドイツ語再学習、および、調査記録も皆無に近いディアダ語を一年に亘って調査する機会も得ました。こうした知識と技術は、前任校沖縄国際大学へ着任した際に掛け替えのない財産であることが分かり、沖縄の言葉へ取り組んだ際にも改めて学習効果を感じ取ることが出来ました。

こうした経験は科研費採択率の高さにも現れ、その御蔭もあり、様々な国際学会での研究発表が可能となり、世界中に知り合いを作ることも可能となりました。本論文が受賞を得たのも、こうした知人との知的交流と知的恩恵の賜物であり、同僚、恩師、家族からの励ましの結果でもあります。全ての方の御名前を挙げることはできません。しかし、その著作に目を通すたびに、新たな知的好奇心を駆り立てることとなる吉野利弘先生（立教大学名誉教授）、秋元実治先生（青山学院大学名誉教授）、平賀正子先生（立教大学教授）へは、その名を記して感謝の意を示したいと思います。今後も感謝の意を忘れず、謙虚に、身を粉にして教育研究に取り組みたいと思います。